「山椒太夫からみえる日本海ルートの文化遺産」

上越教育大学大学院教授
（上越市文化財調査審議会委員長）
川村　知行氏

【略歴】

1982 年早稲田大学文学部助手、1988 年上越教育大学学校教育学部助教授、2003 年同学部教授。専門分野は、日本美術史。主な受賞は 1985 年佐和隆研記念学術奨励賞（密教図像学会）。著作は「お水取り」（保育社：1995 年）、「醍醐寺大観第２巻　絵画（編著）」（岩波書店：2002 年）など。所属学会は美術史学会、密教図像学会、建築史学会、新潟史学会、大学美術教育学会。その他に上越市史編纂委員、高田開府 400 年祭実行委員会委員、などを歴任。

●はじめに～

コーヒーブレイクは終わりましたが、これからは暗い中でスライドを多く使用しますので、眠くなるかも知れません。暗い中から仏様も出てきますが、夢心地の中で極楽往生を味わって頂ければと思います。

～「海の道」を山椒太夫から考える～

今日のお話は、「山椒太夫から見える日本海ルートの文化遺産」と題しました。上越の皆さんに限らず、国民的によく知られた山椒大夫のお話です。今年は高田の開府 400 年祭ですが、日本海事センターの主催ですので、同時に海に関することを考えなければいけません。私も海は大好きです。司馬遼太郎ですと『街道を行く』ですけれど、その街道は街の道と書く街道と海の道という海道があります。この海の道の方が、むしろ歴史的には常に大事なルートだったのです。このことを『山椒太夫』から考えてみたいと思います。かつて直江津には関川に橋がかかっていました。地元の方が皆さんよくご存じな「おうげの橋」です。その「おうげの橋」を日本中に多分有名にして下さったのは森鴎外です。今日レジメを用意しましたが、はじめに、というところを見て頂くと、ちょうど森鴎外の『山椒大夫』（鴎外作品は太夫ではなく大夫です）の書き出しを出だしのところだけ書いておきました。これを読んでみます。「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いている。母は三十才を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。それに四十くらいの女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を「もうじきにお宿でございます」といって励まして歩かせようとしている」。

～『山椒大夫』に描かれた直江津～

これは多くの方がお読みになったことのある『山椒大夫』の書き出しです。地元の人間にとって、こ

の部分をよく読むとちょっと不思議に思います。越後の「春日」というのは春日山の麓の春日です。合併する前の春日村は、市役所の西側で、旧春日村というのは、春日山時代のいわば城下町であったところです。そこから北に進むと「今津」、つまり直江津に着くわけですが、これはとてもおかしいことであると気づきました。何故かというと『山椒大夫』の話を思い出して頂きたいのですが、その前に、森鴎外の『山椒大夫』の大夫はこれは間違っていませんで、大きい方の「大夫」です。普通に呼ぶ何とか太夫というのは、太いという字を書きます。一般的な名称で『山椒大夫』は太い方を書きます。何故「大」と森鴎外が書いたのかは色んな理由があるのですが、その話をすると今日国文学の話になるのでやめておきます。ご興味のある方は調べて頂くと意外な事実が分かります。大学の授業ではどんどんどんどん脱線していくのですが、脱線すると収拾がつかなくなりますので、少し禁欲的にお話を続けたいと思います。

～岩城から大宰府へ～

母というのは岩城判官正氏の妻です。姉が安寿、弟は厨子王、これはよくお分かりかと思います。すると出発点はどこかというと岩城なんですから、今の福島県です。福島県の岩城から流された筑紫の太宰府にいた父親の正氏を訪ねようとするわけです。福島から九州の博多へ行こうとしたら、どのルートにするでしょうか。今でしたら、おそらく常磐線か東北新幹線で東京に出て、東海道新幹線を経て山陽新幹線で、そのまま九州の博多です。博多からちょっと乗れば太宰府ですので、今の私たちはこのルートで当時のことも考えてしまう。ただこの物語というのは、平安時代の話として想定されています。こういう話が作られたのは室町時代だと思いますが、そのころはどのルートで行きましょうか。これは意外なことというか、当たり前なことなのですが、福島からでしたら阿賀野川を下っていけばいいのです。会津を経て阿賀野川を下っていけば、そのまま今の新潟に出てしまうわけです。新潟に出ればそのまま柏崎を経て、米山を超えて直江津に至るわけです。徒歩の旅ルートからすると、鴎外作品はどう考えても変と気づきます。鴎外がこの小説を書いたのは大正４年です。信越線が通った後で、上越線はまだできていません。上越の方はずっと信越線を使っていたわけで、どうもそのことが鴎外の頭にあったのか

もしれません。ここが不思議なところです。

物語に戻ると、岩代の信夫郡を出て、越後の直江の浦に着く、それで往下橋で人買いに騙されて、母は佐渡へ売られて、姉と弟とは丹後の由良の港の長者山椒大夫の奴婢に売り渡されます。ここから虐待を受け、そして逃亡して安寿は折檻されて入水してしまう。厨子王は国分寺に逃げて、丹後国分寺の住職によって籠に背負われてそのまま丹後街道をずっと京都に上って、ちょうど丹波口というところが京都駅の西にあります。ここでかくまってもらって、ときの関白に巡り合って出世をして、母を迎えに行く。そして丹後の国の国司になって報復をするという話です。この話が元になって、中世の物語として今に至るまで、様々に伝わって来ました。

～佐渡の人形浄瑠璃～

私は興味深い本を見つけました。京都府の舞鶴に古い「山椒太夫」の本があったのです。「説経浄瑠璃」と呼ぶ台本です。佐渡をはじめ日本各地に古い人形浄瑠璃が残っています。皆さんがご承知の人形浄瑠璃と言うと、昨今も話題になっている大阪の文楽座でしょう。大阪市が補助金を出すとか出さないとかでまた有名になってくれて、そのお蔭で最近またお客が増えて、逆に市長に感謝しなくちゃいけないと思うほど、また復興してきました。東京でも年に数回、国立劇場で上演されています。文楽というのは、大阪で近松門左衛門が 1700 年位から始めたていたものが、今日に伝わっているものです。ところが浄瑠璃というのは近松以前むしろ安土桃山時代をさかのぼって、室町時代からあったのです。古い形態が日本のあちこちに残っていますが、その一番典型的な例は、新潟県の場合佐渡です。佐渡には何と明治時代に 50 座ほど人形浄瑠璃座があったというので驚きです。集落ごとに人形浄瑠璃座があったことになります。今でも 10 座ほど残っていて、年間に数度の定期公演をしている人形座が現役です。しかも驚いたことに、佐渡では今も山椒太夫の一部を上演しているのです。是非それを古い本を使って復元してみようと考え、今春、高田の世界館で復興初演をしました。宣伝をさせて頂きますと、今年は前半の３段を上演したので、来年の北陸新幹線が開通した後、お花見真っ最中の４月の 18 日と 19 日に残りの後半を上演しようと計画しております。それではスライドで説明して参りましょう。

～猿八座の「山椒大夫」公演：高田世界館～

この写真は今年の４月に高田の世界館で行いました猿八座という座の山椒大夫公演です。これに出てくるのが、おうげ橋の書割です。語りの太夫と三味線で人形が演じます。難しい上に聞き取りにくいのではと皆さん警戒されるのですが、人形劇ですので見れば必ず分かりますので、是非ご覧下さい。このビデオも撮影してありますが、上映するだけで２時間かかりますので止めました。公演を是非ご覧ください。この場面は直江津の沖に出て、騙されて売られてしまい丹後へ向かう安寿と厨子王と、母と乳母（めのと）の姥竹が佐渡へ向かうとシーンです。これが世界館でボロボロなのですが、多くの善意の方から浄財があり、ボランティアの皆さんのご努力できれいになってきましたし、外装も元通りに戻れば、見違えるような明治時代の劇場、映画館がまた復元できるかと思います。ここで映画もしたんですが、昔は芝居もやっていたので、こういう新潟県にしか残っていないような浄瑠璃ができたらどれほど素晴らしいかと考え、復興公演をしたのです。人形をよく見ると分かると思いますが、最初に騙されて船に乗って５人います。顔を見ると、どれがいい奴で悪い奴かというのがお分かりになると思います。

猿八座も文楽座と同じように黒子のスタイルで顔を隠しまして演じますが、10 年程活動しているんですが、年々上手になってきてくれたもので、これなら日本中どこに出しても恥ずかしくない、銭を取れる劇団になってくれたと思っています。次は西と北に分かれてしまうシーンです。この人形は見るからに悪そうな顔をしていますからとても分かりやすいでしょう。

これは山椒大夫です。着ている衣装がとても派手です。こんな派手なのはおかしいじゃないかと受け取る向きもありますが、山椒太夫は派手なのです。次はこれは安寿を逆さ吊りにして折檻しているところです。人形だからこそ、見ても不安感のない残忍なシーンができるので、ここが人形の魅力でもあります。このスライドを見ているだけでも泣けてきますが、実際に舞台を見て頂くと、もっと泣けます。

～安寿は生きていた：かたちを変えて伝わる物語～

次のシーンは「鳴子」が見えます。これは佐渡で、お母さんが盲い（めしい）になって、「安寿恋しやほうやれほう」という有名な話です。佐渡に伝わっているやり方は、元々の本が今の舞鶴で伝わった本で、実は安寿は生きていたという話なのです。実は安寿も佐渡を訪ねて再会するのですが、盲いになったお母さんに謝って杖で打たれてしまい亡くなってしまいます。入水した方がまだ良かったのではないかと思うほど切ない話になっています。安寿と厨子王の話も色々なバージョンがあったのです。有名な話ですが、忠臣蔵が流行ると次々に異なる忠臣蔵が多く上演されるのと々です。たとえばウルトラマンがヒットすと、次には「帰ってきたウルトラマン」になったり、寅さんシリーズがいくつもずっと続いたのと同じなので、元の話は１つの原型だったはずですが、段々だんだん尾ヒレが付いて豊富な題材になっていきます。

～海道で運ばれる伝承・伝説・芸能～

最後だけはめでたしめでたしになります。盲い（めしい）のお母さんに対して、お守りであったお地蔵様を目に当てるのです。するとお地蔵様から光が放たれて、お母さんの目がまるで貝の潮が溢れるよ

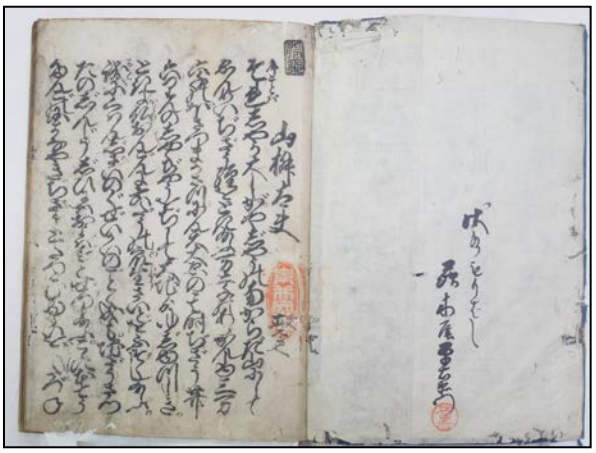
うに出て、目が開いたというように森鴎外は文学的に表現していますが、そのシーンです。大事なことは、「説経浄瑠璃」は、残忍な話や人買いの話でも、最後はお地蔵さんが助けてくれるというところです。最後はめでたしめでたしになるのです。興味深いことに、厨子王がずっと肌身離さず身につけていたお地蔵さんだとする伝承を持ったお地蔵さんが実はあちこちにあるのです。上越にもあるでしょうか。上越の皆さんは安寿と厨子王の墓と言われる五輪の塔がちょうど関川の河口のところにあるのをご承知だと思います。これも日本中にいくつかあるのです。こういう話は日本中になんであるのだろうか。それはやはりこういう街道を通した伝承、伝説、芸能が伝わっていって、それが各地に定着していることを示しているのです。私が考えている海の方の海道というのは、もちろん海の道というのは、陸以上に物資が運ばれる流通の基本的なルートなんですが、その基本的なルートがあるのだからこそ、そこに人や文化も一緒になって実は移動しているんだということにお気づき頂ければ幸甚です。このことを今日のメインのテーマにしたわけです。

～古典芸能の調査、研究～

次のスライドは厨子王が逃げ込んだと言われている京都の丹波口にある権現寺というお寺です。丹波の街道ですから、幾度も合戦があって、この辺は墓だらけなのです。そこにあるお寺なのですが、これは地蔵堂なんです。京都駅からすぐ近くで山陰線に乗ってひと駅乗れば丹波口です。そこに権現寺というお寺があります。本当に小さなお寺ですが、安寿と厨子王に興味をもったら必ず訪ねなければいけないところです。これは今回の復興公演で使ったテキストですが、多分 1700 年位の台本なんです。これを調べるとまた色々なことが分かってくるのですが、これが表紙ですね。ボロボロですけれど、歌舞伎や文楽の研究では不可欠な研究資料です。私の場合は仏教美術ですからお寺で古文書を調べたりしていますが、こう本が文化財とセットになって寺の蔵の中にしまってあり

ます。こういうことを研究するのは国立劇場の研究部や東京国立文化財研究所の芸能部で、日本中にある古典芸能や民俗芸能を調査把握しております。その一環で浄瑠璃も着々と研究が進められています。

～史実と物語：平重衡と山椒大夫の最期～



次は国分寺の住職がこの葛篭（つづら）を背負っていますが、中に厨子王が隠れてという場面です。大堰川と書いてありますので、宮津から丹波街道を通って京都へ逃げていく、山陰道で今の山陰線と大体同じルートです。古い本ですからボロボロなんですが、次は山椒大夫が首をはねられる場面ののこぎりです。来年はこのシーンを復元しようかと思っています。とても因果な話で、のこぎり挽きするのは山椒大夫の息子なのです。こののこぎりは実は鉄ではなく竹なのです。この話はどこから来るかというと、原型があります。平家は東大寺と興福寺の奈良を焼き討ちしますが、ちょうど源平の合戦の頃の話です。その首謀者であるとされたのが平重衡です。平重衡は平家が滅亡した折に捕えられて、頼朝は重衡の身を興福寺に引き渡したのです。すると興福寺は奈良と京都の境、木津でのこぎり挽きで処刑をしました。この説話が元になって、山椒太夫の物語に入って構成されたことが知られます。

丹波は天橋立のあるところで有名ですが、これは舞鶴城です。少しずつ復元されてきまして、近くの舞鶴図書館に今山椒太夫の本がありました。ちょうど桜が咲いて舞鶴はきれいなところです。細川幽斎がいた城ですから、茶道の文化も残ったところです。西舞鶴と東舞鶴って２つ駅がありますから、舞鶴湾は巨大な入江があります。なぜ天然の良港なのかは、日本海が荒れるような季節に理想的な逃げ場に

なるからです。三国港も季節風を避けられる良港です。富山湾なら放生津、今の新湊です。北陸には浄土真宗の方が多いのですが、越前の吉崎の御坊は、季節風を避けて船泊ができる著名なところです。では直江津はどうかということは後で問題にしたいと思いますが、宮津と舞鶴には安寿と厨子王の伝承地がたくさんあります。何箇所かをご紹介しますと、これは由良川ですね。「由良の戸を」という和歌の由良の戸です。この川を下って半島を越したら天橋立ですが、まずは宮津です。見てみましょう。

～宮津の安寿姫塚～

この写真は安寿が入水したという場所なのです。どんなに悲しいところかなと思って行ったのです。すると、かわいい橋が架かっていて、山には桜やコブシがたくさん咲いているところでした。次は安寿を祀ったお堂。安寿姫塚とあります。後ほどお話ししますが、新潟県にも実は安寿塚があります。鎌倉時代の宝篋印塔なので、これが実際の安寿の墓とは私も思っていないのですが、中世の墓石に安寿と厨子王の伝承がと残っているので、この辺が人文科学の面白さなのです。この池は安寿が入水した場所ということになっています。桜とコブシが咲く風景を見ると、折檻されて入水した安寿の話ですので、こんなきれいなところなら救いがあるにちがいないと思いました。私もそう思った

のですから、この話を作った人も、安寿がどこで入水したか、こういう場所だったらいいという思いが先行して、物語に合った場所を選び、伝承を作ったのではないかと思います。本当に美しいところです。桜が１本咲いていて、その向こうが安寿の塚ですから、救われる思いです。ここも町おこしとして、安寿祭を毎年行っているそうです。

～山椒太夫屋敷跡と地蔵堂～

由良の歴史を探る会が作った山椒太夫屋敷跡、こういう看板を見ると、覗かなくてはいけません。安寿塚があるのですから、山椒太夫の屋敷もなくてはなりません。当然、山椒大夫の墓とされる場所もあります。この五輪の塔はみんな鎌倉時代の五輪の塔です。直江津でしたら十念寺、昔の浜善光寺には、五輪の塔がたくさん並んでいますが、同じような風景が見えます。また近くの国分寺跡には、厨子王の守り本尊のお地蔵さんを祀っています。地元の篤志家がお金を出して作った山椒大夫屋敷跡というところです。明らかに観光用に作った安寿と厨子王。安寿足湯と健康サロンですから、安寿姫入湯の図というのまで置いてあります。こういう町作りもいいものだと思いました。この近くに厨子王伝説の地蔵堂があります。このお地蔵さんは錫杖を右手に持っていて、左手に宝珠を持っています。顔には修理の跡があるものの、体躯を見ると典型的な平安時代の末期から鎌倉時代初期と見ました。作者は快慶です。運慶・

快慶として著名な仏師、快慶の作ったお地蔵さんなのです。修理しましたら快慶の銘が出てきた判明し、重要文化財に指定されました。

～快慶作のお地蔵さん～

次は山椒大夫の首塚とされる筐鏡印塔、もちろんこれも後で作った伝承物語です。ただ、厨子王物語のお地蔵さんを調べてみれば快慶でした。私は上越市の文化財の委員長として文化財指定をしています。宮津で単なる伝説と思われていた地蔵が、調査をすれば快慶の名品だったのです。でも事情はむしろ逆なのです。そういう名品があるから色々と伝承が生まれ話が作られ脚色されていくのではないかと思います。歴史としての真実ではなく、伝承があるという意味を歴史的に考えることが重要なのです。安寿の物語は悲劇ですが、悲劇だけでは困るので、救いのある話に作り変えていくのは人間的な行為です。

今に至るまで山椒太夫の話は様々なバージョンができてきました。浄瑠璃の話はとても残忍な話でしたが、文豪森鴎外は美しい文章で小説に仕上げ、安寿と厨子王の新たな話を創作したわけです。

以上のように、森鴎外から山椒太夫の世界に入り、千年ほど遡りながら、日本の歴史を読み取って来ましたが、日本の海の海道が結んでいたことを暗示しています。

～地元の文化財に誇りを持って～

ここで、舞台を丹後から越後に移します。直江津は観光地としてはそれほど著名ではないかも知れません。ただ、地元の人はあまり認識されていないようですが、安寿と厨子王に関心を持っている人なら必ず直江津に来ています。能の研究者が何度も佐渡に足を運ぶのと同じです。上越市の文化財の委員長として、「これは良いものだから文化財に指定しよう」と私は主張することこあります。ただ、「それは先生は間違っている。そんな良いものがこの町にあるわけがない」と最近、言われたことがあります。私が努力して積み上げてきた仕事は一体何なのだろうかと、相当ショックを受けました。皆さんどうか誇りを持って頂きたいのです。ローカルな一地域だけの問題ではなく、一地方で良いものは日本全体にとっても良いものなのです。私たちが普段暮らしている近くにあるものは余りにも見慣れ過ぎているので気がつかないだけなのです。近所にあってそんな有名なものは奈良や京都だったら分かるけれど、こんなところにはないだろうと思いがちですが、逆なのです。私は奈良や京都で仕事をしていながら、越後に住み、「ここにも奈良や京都と同じレベルのものがある」と発見ながら考えているので、なにとぞ信用して頂ければと思います。

～瞽女さんと山椒太夫～

上越に戻ります。高田の寺町にも山椒太夫の遺産があります。これは山岡太夫の墓と言われているものです。日蓮宗の妙国寺にあります。山岡太夫とは、船から船に売り飛ばした直江津在住の人買いです。艀（はしけ）ほどの小舟で、沖にある一回り大きな親船に、安寿一行を売り渡した本人の墓まで高田にはあるのです。何故あるのかなと考えてみました。この地域で森鴎外の小説で山椒太夫の話が有名になったのではなく、実はそれ以前から、この地域では瞽女（ごぜ）さんが山椒太夫を語ったことで知られていたのです。舞台が直江津の話なので、言わばご当地ソングだからこそリクエストも多く、瞽女さんが山椒太夫を語ったのです。その結果、誰もが聞き知っていたのです。それに加えて森鴎外が小説を書いたものですから、もう教科書のように国民的に理解されるようになったのです。この地域の場合は、とりわけ縁があるものですから著名なものになってました。岩城の方からきて宮津へ、佐渡へ連れ去れたらしい、では、地元の人は誰というと、売り渡した人買いの山岡太夫です。そこで、山岡太夫の墓もできたのでしょう。仏教美術の研究をしているのですが、類例がないため、この像を説明できません。ただ、作られたのは明治になってからかなと推測されます。

～山岡太夫の墓と乳母嶽神社～

居多神社の裏参道を海側に抜けると鳥居がありますが、ここに乳母嶽明神と書いてあります。これは乳母嶽＝宇和竹というのは先ほど出てきた女中役の乳母（めのと）姥竹です。佐渡に売られるくらいならと海に飛び込んでしまった姥竹です。この話も瞽女歌で聴

いているわけですから、ここは姥竹さんも祀らなければということで、祠（ほこら）ができたのでしょう。実際はおそらく中世の墓だと思われ、けっして新しいものではありません。興味深いことに、もっと立派な乳母嶽神社が直江津の西の吉浦にあります。ここも桜が咲き、海に入水した乳母を桜で供養できます。女性にご利益があるそうです。出産の後でお乳が出ないと困るので、お参りするという話を聞いております。

～安寿と厨子王の供養塔～

安寿と厨子王の供養塔が関川の河口にあり、よく知られています。元の場所は不明ですが、この海岸線に沿った砂丘にはこの種の五輪塔がたくさんあって、中世の墓地ですので、関川を舞台に日本海を望む場所にあった鎌倉時代の五輪塔に後世になって、安寿と厨子王への供養を託したのでしょう。関川を挟んで対岸には佐渡汽船の乗り場があり、とても象徴的な場所だと思います。

～山椒大夫から考える表日本・裏日本～

ここから佐渡へ丹後へ海道が船で山椒太夫とつながります。私は東京から奈良や京都を往復していれば日本の美術と日本の文化は分かると思っていたのですが、上越に赴任しましたら、北陸線に乗り始めると、この街道の方がむしろメインルートだと気づきました。表日本と裏日本という世界感は近代以後の考え方です。教科書的には理解していたつもりですが、私は新潟県に来て住んで実感できました。このような海道が古くからあって、かつて裏日本の方が表日本だという認識も、少なくとも日本海側では

常識になってきました。

～妙上院の大日如来像～

この大日如来坐像は、箕輪台の向こう側の明静院です。岩殿山にあります。その山の奥には湯殿山、あの辺の山は梵天山とか薬師岳とか、神がかったというか、仏がかった山ばかりです。この大日如来像は平安時代後期 12 世紀で国指定の重要文化財なのです。美術史の上では、新潟県内にある一番良い仏像です。これ以上のものはないベストです。五仏の宝冠を被り、手は知拳印を結んでいますので、両界曼荼羅の金剛界曼荼羅の中尊である大日如来と同じですから、金剛界大日如来であることはお分かりになると思います。同じような仏像は高野山にもありますが、ちょうど同じ位の大きさで重要文化財です。岩殿山にあるのも当然同じ重要文化財で同じレベルの作例なのです。地方にあるものは中央にあるものから劣ることはけっしてありません。同じレベルの 12 世紀の作例なのです。

～大日如来像と平泉～

昨今は仏像のブームですので、京都や奈良や高野山に多くの方がお参りしたり、博物館や美術館で仏

像に触れる機会も増えています。私の専門である美術史の学界とっては大歓迎なです。この岩殿山の大日如来も実は仏像ファンなら誰でも知っているとは言いませんが、仏像オタクでしたら必ず見に行く像なのです。27 年春からは、東京の仲間や友人たちに「新幹線日帰りでもいいからこの仏像を見にいらっしゃい」と言うことができます。

東北平泉の中尊寺の光堂には金色に輝く仏像群があってよく知られています。それこそ東北新幹線で日帰りも可能です。きらびやかな光堂は世界文化遺産の象徴にもなっていますから、世界中から観光客が来ますが、中尊寺の仏像群は奥州藤原氏の時代なので、明静院大日如来と同じ 12 世紀の仏像です。それでは、中尊寺の仏像群は奥州藤原氏ですから平泉で作られたのでしょうか。。問題は誰が作ったのかということなのです。京都の仏師が作った仏像なのです。平泉に行って作ったと考えてもいいですが、都で作った仏像を船で運んで行ったと考える方がもっと面白いことになります。どこを通ったかは皆さんはお分かりでしょう。源義経一行が通ったのは勧進帳で有名な安宅の関でしたから、当然この直江津を通って酒田まで行けば、川を遡っていけば平泉に着くのです。日本海側から行くわけです。

～大日如来像はどこでつくられたか～

中尊寺光堂には孔雀の文様を施した螺鈿の装飾が有名です。これはどこで作ったのでしょう。京都で作って船で運び平泉で組み立てたと考えた方が自然でしょう。奥州藤原氏ですから黄金の財力がありますので、材料は京都から取り寄せ可能です。仏師や大工や職人も、雇って京都から連れてくればいいわけです。すると京都の材料で京都の仏師が作るのは京都で作ったら京都のもので、平泉で作ったらメイドイン平泉でしょうか。同じ作家が同じ材料で作るのでしたら、パリでもニューヨークでも日本でも、どこでも同じではないかということなのです。

それでは明静院の仏像はどこで作られたのでしょうか。この大日如来は実は材料が榧（かや）なのです。出来映えからすると都の仏師、しかし、材質は榧、すると、京都の仏師が越後で制作したことになります。平泉の仏像はヒノキです。ヒノキだとすると、やはり近畿地方の材料なのです。岩手や青森でしたら、材質は同じ針葉樹でもヒバが多いのです。越後の場合も同じでヒノキはないのです。美術史の

研究もＤＮＡ鑑定を試み始めています。早ければ 10 年位で解析調査も可能になりそうです。

～海道を通って伝わる文化～

今日の話をまとめたいと思います。以上の他に中国陶磁器の流通も興味深い関連があります。文字通り「舶来品」でしたのですから。海の道の海道は文化財が通った道でした。仏像が通った道、陶磁器が通った道です。実は芸能が通った道でもありました。佐渡おけさと九州熊本の牛深ハイヤ節に関連があることは、民俗芸能関係の方や、芸能祭好きの方でしたらご存じのことだと思います。このあたりで有名なのは、越中の八尾の風の盆ですけれど、あれもその流れをくんでいるということになっています。時間が経るごとにその地域地域で完成度が全然変わってくるので別のものになるのですが、佐渡おけさも多分有名になったのはむしろ明治以降の話で、実際にレコードができて有名な歌手が佐渡おけさを歌うことによって、どんどんどんどん広がってくるんです。元の形がどういうものかというと、正調佐渡おけさとか、うちの主人が歌っているのが元祖なんだとか、おそらく元はだいたい皆同じなのです。海の道というのは、一般的には米の道だったり、あるいは北海道ものの海産物の道だったりでしょう。江戸時代の北前船のイメージで考えられています。ただ、北前船の以前から海のルートを使って、どの時代も芸能を始めとして、あらゆるものが文化が流通したのだと思います。

●おわりに～

私が考えている山椒大夫から気がついたことは以上のようなことです。探せば探すだけ、同じような事例が出てくるはずです。たとえば、越前の方に米を持っていく、帰りに何を積んで帰ってくるんでしょう。笏谷石という墓石を持ってきています。直江津にも結構たくさんその石を使った墓や石材があります。また、佐渡と直江津は航路でつながっていますが、この航路は、そういう関係の方がいらしたら教えて頂きたいのですが、海流に逆らって進まなくてはなりません。まっすぐ舵をきれないので、前には進めず、流されて行きながら小木に着くのです。佐渡の金は高田に来たんでしょうか。沈没船がたく

さんあるのです。ですので沈没船から引き揚げた焼き物の壺が上越市埋蔵文化財センターにたくさんはあるのですが、そのうちに金が詰まった壺でも出てくれば別ですが、危険な海道ですので、恐らくないと思います。佐渡から江戸に持っていくのは、柏崎か出雲崎に渡るのが安全だし近道だったのだろうと思います。そこにも芸能の道というものがあるし、色々な事例を見出すことができるはずです。以上のように、芸能から探ってみる文化の来た道について日本海ルートで考えてみました。文化遺産は私の仕事ですから、今後もなお多くの発見をして行きたいと思っています。お願いしたいことは、私が良いものだというものは良いものだと、どうか信じて下さい。それをお願いして私の最後の言葉とさせて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。